

更級日記上洛紀行の形成

地理上の問題点について

遠 田 晤 良

一

更級日記に家集的痕跡が濃厚に存することは、これまでもしばしば指摘されてきた。日記中に歌は、連歌一首を含めて八十八首採録されている。作者五十年余の生涯の回顧にあたって、歌はその回想の指標であるとともに、折々の心情の再現として主題の展開を担うものである。しかし、簡単な詞書と比べてよい説明を付しただけの歌が、前後の記述と脈絡なく配されている場合も少なくない。これを家集的痕跡というならば、この家集的痕跡が、統一的主題の下に整序されるべき自叙の流れを分断する構成上の欠点ともみなされる。

杉谷寿郎氏は、「家集的章段の存在は日記を記念碑化する意図から出た歌稿のくりこみの結果でもあって、作品を十分に統一しきれなかった作者の構想力の弱さに、より重きをおいてこの現象を考えておきたい」と、作者の構想力の弱さを認めるとともに、「歌稿のくりこみ」が「日記を記念碑化」する意図を持つものであることを指摘された。

たしかに更級日記は、家集あるいは歌稿、紀行文、身辺雑記といった何らかの素材の存在を想定させる。八代集抄本新古今集に存する「祐子内親王女房家集一卷」という注記も、日記とは別種の家集の存在を示唆するが、それが日記そのものをいうとも考えられ、速断は許されない。日記に先行する「家集」の存在は疑問であるにしても、素

材としての歌稿の存在は疑いを容れない。これら折々の手控えを晩年に整理編集し、さらに補筆して全体の統一をはかったと見做される。

構成の破綻といい、構想力の弱さと評されるのは、これらの素材に有機的な統一が果たされていないと見做されるからである。しかし、この日記の家集的痕跡といわれる歌稿のくりこみが、日記の構成上どのような意味を担っているものであるかということがこれまで十分に思量されているわけではない。歌稿のくりこみが必ずしも「日記を記念碑化」するためのものとはいえない切れないものがある。歌が担う折々の心情表現が、日記構成上どのような意味をもつかを問うことによつて、構想力に対する評もまた違ったものにならざるを得ないので、なからるか。

構成上の破綻として指摘されるものは、日記中随所に挿入された家集的痕跡だけではなく、上総から京への上洛の旅の記録が異常に長大で、日記全体の20%近くを占めている点や、日記末尾の蛇足とも見られる五首の詠草の配置なども挙げられる。

上洛の旅の記に関して近藤二一氏は、「自己の体験した恐らく最長の旅であり、未だ経験の浅い若き日の目に映じた東海道の幾山河の印象は生涯の回想録に省くに忍びないものであったに違ひない。所が圧倒的な量を有するこの道の記も質的にはあまり優れたものではない。自然を描く筆は未だ固く観察も類型的で頗る精彩の乏しいものであ

る。全体の構想から言へばこの東海道の道の記の介入は明らかに失敗であったといへる」と評された。

これに対してこの旅の記録がもつ異質性や独立性を認めた上で、それが日記全体の主題や構成にかかわる意義を積極的に読みとろうとする論も多い。東国故郷意識ともいべき、日記執筆時における作者晩年の心境や意識が、ここには濃密に封じこめられていると見られるからである。構成上の破綻と見られる点も、むしろ構成上の顧慮を失してまで記しとどめようとした作者の回想の姿勢や執筆時の意識のありようをうかがわせるという点で、作品形成の契機にかかわる重要な指標であるということもできるであろう。

拙稿「更級日記における『悔恨』」において、構成上の問題点である日記最末尾の詠草群と日記執筆時の心境とのかかわりについて私見を述べてきたところである。この稿も日記中の詠歌群の作品形成にかかわる意味を再考するところに目的があるが、上洛の旅の記に視点を置いて考察を加えていきたい。

二

更級日記が八十八首（含連歌一）の歌を採録していることは先に述べた。そのうち作者自からの歌は連歌を除くと六十四首である。ところで、更級日記の執筆に当って孝標女が強く影響を受けたとみなされている「蜻蛉日記」は二百六十首の歌を含みそのうち道綱母自身の歌は百二十余首である。この蜻蛉日記について大鏡兼家伝に「この殿のかよはせたまへりけるほどのこと、歌などかきあつめて、かげろふの日記となづけて世にひろめ給へり」とあるのは周知のごとくである。これは蜻蛉日記が少なくとも私家集めいた草稿をもとに、それを発展させる形で書かれたものであるとみなしている。

道綱母が生涯家庭の人であったにもかかわらず、秀歌によって専門

歌人に比肩する評価を得ていたことはいうまでもない。してみれば「きはめたる和歌の上手にておはしければ」「歌などかきあつめて」と強調されるのは自然であるかもしれない。また「身の上をのみする」内面的な自己表現を、仮名散文と和歌との緊密な融合によって拓いていった先駆的文学への理解に立つものともいえるのであろうが、和歌が蜻蛉日記を形成する重要な要素であることへの理解を示している。

もとよりそれは蜻蛉日記を一読すれば明白なことである。贈答歌を駆使して、兼家との結婚以来の愛情の歴史を綴り、内省的に自己を凝視した独詠歌によって生の軌跡を彫啄する。土佐日記の先蹤こそあれ、蜻蛉日記以前にかな日記の文体が確立されていたわけではない。道綱母が自己の体験を日記として表現する道を探ったとき、私家集や物語の表現の方法をとり込み、折々の内心を託した和歌を中心に据えて、みずから愛怨の文字を切り拓いていくほかなかったのである。

更級日記が仮名日記の先蹤にならって自からの生涯の軌跡を日記という形に整えようとする場合、蜻蛉日記が模索的に新たな表現を拓いていった独創とは同断に論ずることはできない。しかし、歌が回想の指標であるばかりでなく、折々の内面の真実を忠実に再現する重要な要素である点において何ら変わるものではない。同時に歌の採録が生涯の回想に奥行きを与え、厚みを与え、それがとりもなおさず一個人の回想記に文芸性を保証するものだと考えも作者にはあったであろう。それ以上に「昔より、よしなき物語歌のことをのみにしめて、夜昼思ひておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」という悔恨の言辞が、とりもなおさず過去半生において物語に執したと同等の重みにおいて、歌に執してきたことの告白であるならば、日記中の歌が自からの生涯の折々の心情の再現に担っている意味は決して小さなものではない。

犬養廉氏が考えられたように、更級日記を歌を含む章段と歌を含ま

ぬ章段に分け、歌を含まぬ章段は「家集と別個に、自由に執筆構成し得たもの」であって、自叙構成の軸をなすものだと重視することは、日記の基本構造を解明する上で極めて有効な視点である。しかし、反面「家集の素肌」をのぞかせる章段が、自叙形成にさほど重要な意味を持たないものとすることはできないであろう。「よしなき物語歌」という晩年の否定的口吻にもかかわらず、歌はたとえ「よしなき」わざであっても、それによってのみわが心の内奥のありようを確かめ、秩序だて、表現するほとんど唯一のわざであったのである。

歌は作者が過ごしてきたその年代、その時々々の心情の忠実な再現を、それ自身可能にするものであるが、日記執筆時の主題意識や構成意図から後年の改作や詠み加えという場合もあり得よう。また、歌は配置された前後の状況によっておのづから新たな意味を担う場合すらあり得るのである。その意味では歌稿と日記との二重性を想定することによって、この日記における和歌の配置の意味をとらえ返すことも可能であろう。

「あづまぢの路の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」という冒頭起筆の自己規定には、孝標女晩年の複雑な心の翳りが封じこめられていることが、これまでさまざまに指摘されてきた。自己を三人称化しておぼろに登場させる客観化にはほの見える物語化志向や、少女期の成長の場を遙か東国の辺境とする誇張表現に「自虐の身づくろい」を読みとるもの、さらに「あづまぢの路の果てよりもなほ奥つ方」を常陸よりもお奥地とする虚構と見て、その虚構に作者が強く共感を寄せた浮舟にわが身を比定する秘かな情念の疼きを読みとるものなどである。これらの冒頭起筆に込められた複雑な翳りに着目する論説は、平凡な女の一生の直線的な回想から、陰影に富んだ重層的な心の軌跡に穿入する立体的な視野を展いた。

しかし、この冒頭起筆「あづまぢの路の果てよりも、なほ奥つ方」

と少女期の生活空間を表現する点に、積極的な虚構を認めることができるだろうか。

諸注の多くはこの冒頭に、

あづまぢの路のはてなる常陸帯の

かごとばかりもあひ見てしがな(古今六)

の引き歌を指摘する。この歌に見られるように、「あづまぢの路の果て」を常陸とする都人の感覚からすれば、上総を「なほ奥つ方」とするには事実の歪曲にもなりかねない。その意味からすれば単なる引き歌による文飾といていいものではない。

作者には自分が東国に生育した体験に対するこだわりがあることは事実である。そのこだわりが源氏物語から浮舟を見出し、秘かに共感を抱くに至らしめる導線である。しかし、そのこだわりは「いかばかりかはあやしかりけむを」という謙退とは裏腹に、「今の世の人は十七八より経よみ……」という同世代一般の貴族の子女とは異なる体験として、晩年の作者の意識の中で積極的な価値を主張するものであった。

それは人生の起点を東国上総との離別の時に定め、さらに長文の紀行を連続して惜別の思いを籠める孝標女の日記執筆の姿勢に明らかなることである。東国上総は物語への憧れを育んだ、無垢な魂のふるさとということもできよう。現実には上総は「人の国」「はるかなる世界」である。都に老い朽ちようとする晩年の孝標女にとって、現実空間の距離は、芒々たる記憶の彼方に甦える少女の日の、呼び返すべくもない時間のへだたりとないまぜになって、いっそう遙かなものと実感されたことであろう。還帰し得ないふるさと上総を「あづまぢの路のはてよりも、なほ奥つ方」と表現するのは、遙かな時空のへだたりを意識する心理的必然だったといっているのではないだろうか。冒頭に積極的に虚構をかまえたとするよりは、多分に感傷に浸された晩年の回想のまなざしを読みとり得るように思うのである。

また、常陸帯の引き歌が意図する連想的意味は「かごとばかりもあひ見てしがな」にあるはずであるが、これも常陸帯の神事からむ男女の結びつきに対する原歌の意味をそのままとるにあたらぬであろう。「一目でいいから会いたい」というのは、還るすべない少女期への懐旧に疼く内奥を重層的に託した引き歌と見てよいであろう。

引き歌を文飾として冒頭に配するのは物語の一定の型式であるとする指摘もあるが、原体験を古歌を通して梳き返し、古歌に依拠して形を整えてゆく姿勢に最初に注目しておきたい。

三

孝標女が一途な物語への憧れを抱いて上洛の途につくのは十三になる年、寛仁四年(1020)九月三日のことである。

あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、

……
十三になる年、のぼらむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

上総での四年の歳月を物語憧憬の胚胎という一事に集約して、一気に旅立ちに筆を運ぶ、日記序章は上洛の旅の記の序である。

いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあるなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままにそらにかかおぼえ語らむ、いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、
物語への憧れは、物語の「多くさぶらふなる」都への憧れとひとつ

である。「身を捨てて」の祈念が実現した上洛の旅は、憧れが現実のものとなる心躍る旅立ちであって不思議はないが、十二月二日京に着くまでの九十日の旅に物語への熱い思いは影をひそめ、住みなれた上総での生活との別離に涙する少女の日の感傷が表に立てられる。上洛の旅の記の基調はむしろこの別離の哀愁にある。

年ごろあそび馴れつる所を、あらはにこほち散らして、たちさわぎて、日の入り際のいとすごく霧りわたりたるに、車に乗るとてうち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

四十年の歳月をへだててなお鮮やかに甦える旅立ちの日の情景である。少女の日の感傷といえはいるが、門出の記述の後に立ち戻って念願なかった心躍りよりはことさらに別離の悲哀を記す姿勢に注目しておきたい。

ところで、この上洛の旅の記には当然のことながら、都への行程で接した東海道(一部東山道)の国々の地名が数多く記されている。郷や里の名、山や川の名をはじめ、通過した国々の浜や浦、橋や寺などの名まで、都合四十五箇所及ぶ。旅の途次の印象的なできごとのために記憶されたもの、旅情をそそる風光の美しさ故に印象深いもの、伝説への関心の故に深く心に刻まれたもの、さらには歌枕なるが故に無視できなかったものまで、地名を記す折々の心情は一樣ではない。上総から京までの長い道程からすれば四十五の個有名詞は多いとも少ないともどちらともいえないが、十四歳の少女の記憶によるものだけだといえないことは確実であろう。

これらの地名の中に歌枕が多く採録されていることは諸家によって注意されて来た。阿部秋生氏は「この三か月の長旅の間に、作者の眼にとまり、記憶にとどまったものといえは、その殆んどすべてが歌枕であり、歌枕であるが故に興味をおぼえているということである。そ

こに作者自身のオリジナルな感想や発見があるわけではない」といわれた。作者の平凡で常識的な感覚を評することに主眼があり、「作者の眼にとまり、記憶にとどまった」「殆んどすべてが歌枕」だということはできないが、歌枕意識は強いのである。

横走の関のかたはらに、岩壺といふ所あり。……富士の山はこの国なり。……清見が関は、片つ方は海なるに、……田子の浦は浪たかくて、舟にて漕ぎめぐる。……大井川といふ渡りあり。……横走の関、富士山、清見が関、田子の浦、大井川、いずれも歌枕である。

八橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見どころもなし。二村の山の中にとまりたる夜……宮路の山といふ所越ゆるほど、……三河と尾張となるしかすがの渡り、げに思ひわづらひぬべくをかかし。尾張の国、鳴海の浦を過ぐるに、……

八橋、二村の山、宮路の山、しかすがの渡り、鳴海の浦すべて歌枕である。しかも「しかすがの渡り、げに思ひわづらひぬべく」というのは

行けばあり行かねば苦し

しかすがの渡りに来てぞ思ひわづらふ〔中務集〕

を踏まえた表現である。全てがこうではないことは勿論であるが、歌枕に寄せる強い関心は、これら紀行の一部を瞥見することによって直ちに確かめるところである。

これは通過した土地土地での印象や体験を歌枕という通念化したイメージによって読者と共有する、対読者意識の強い表現手法ということになるであろうが、作者の側から言えば、歌枕や古歌の知識に寄り添うことによって原体験に形を与え発想を整える姿勢であるといえよう。

歌枕ではない知名度の低い土地土地の印象も、個性的な感覚にもと

づく表現が獲得されているとはいいがたいが、歌枕に依拠した部分は特に類型化はまぬがれない。常識的な感覚の人と評されるのもやむを得ない点である。しかし、これら歌枕を中心とした地名の一つ一つが「人事と自然との自立した景情を保有しつつ京と東国との間を一連りにつなぐ、年経るとも朽ちることのない確固たる道標群だったのである」と秋山虔氏が述べられたように、遙かな時空の彼方にへだてられた東国への思いを担ったものである。

そうした意味をもつ地名は当然のことながら旅程に添って上総から京へ順次たどられるのであるが、ところどころ地理的順序の乱れているところがある。それらは作者の記憶の誤りとして指摘されてきたところである。地名の変遷などによって今日では直ちに記憶違いとはいえない切れない不明な部分もあるわけであるが、不審とされている箇所は次の五つである。

(一) 黒戸の浜の記述順。

上総の国府を門出した孝標ら一行は「いまたち」―「いかだ」―「まののてう」―「黒戸の浜」とたどったと記述されている。「いかだ」「まののてう」とすでに下総国に入ったと記されているわけであるが、「黒戸の浜」は上総である可能性が高く、地理的順序を乱している。黒戸の浜は諸説あるが千葉県君津郡の海岸で、現在木更津の畔戸かとされる。他に千葉市登戸と千葉郡稲毛との間にある海岸「黒砂」がそれだという説もある(大日本地名辞書)。また限られた一地带ではなく津田沼、幕張一帯の称とする説(新潮日本古典集成「更級日記」秋山虔氏校注)もあり、これに従えば矛盾はないことになる。にわかに決し難いが、いずれにしても不審な点である。

(二) 太井川の所在を下総と武蔵の国境とする点。

黒戸の浜に続く記述であるが「そのつとめて、そこを立ちて、下

総の国と武蔵との境にてある太井川といふが上の瀬、まつさとの渡りの津にとまりて」と「まつさとの渡」での乳母との離別を描く。太井川はまだ下総国内であり、下総と武蔵の国境をなすのは隅田川である。

(三) あすだ川(隅田川)を武蔵と相模との国境を流れるとする点。

「武蔵と相模との中にゐて」「在五中将の『いざ言問はむ』と詠みける渡りなり。中将の集には隅田川とあり」と記述されているが、隅田川であれば下総と武蔵との国境でなければならぬ。(二)の誤りと結びついたものであり、不審な点である。

(四) 富士川と大井川の記述順が地理的順序になされていない点。

「大井川といふ渡りあり。水の、世のつねならず、すり粉などを濃くて流したらむやうに、白き水はやく流れたり。」

富士川といふは、富士の山より落ちたる水なり。その国の人の出でて語るやう……と記述される。「富士の山より落ちたる水なり」という誤解はともかく大井川を渡って富士川に至るように読めるのは、地理的不審といつてよいであろう。清見が関の前にあつてしかるべきである。

(五) 三河から尾張にかかる地名が、地理上の順序を大きく乱している点。

日記の記述順では、猪の鼻―高師の浜―八橋―二村山―宮路の山―しかすがの渡り―鳴海の浦とたどったことになっている。地理的には、猪の鼻―高師の浜―しかすがの渡り―宮路の山―八橋―二村山―鳴海の浦でなければならぬ。

以上五つの点が地理的な誤りと見なされる点である。地名そのものの記憶違いや聞き違いといったものは除外する。この五つの誤りの個所をより明らかにするために、日記の記述順に従つて地名を列記すれば次のごとくである。

1	いまたちといふ所	上総
2	いかだといふ所	
3	まの(まののてう)	
4	くろとの浜といふ所	下総
5	太井川	
6	まつさとの渡りの津	
7	武蔵野 <small>(むらさき野 ふと聞く野)</small>	武蔵
8	竹芝といふ寺	
9	ははさうなどいふ所	
10	あすだ川(隅田川)	
11	にしとみといふ所	相模
12	もろこしが原といふ所	
13	足柄山	
14	横走の関	
15	岩壺といふ所	
16	富士の山	
17	清見が関	駿河
18	田子の浦	
19	大井川といふ渡	
20	富士川	
21	ぬまじり	
22	小夜の中山	遠江
23	天ちうといふ川	
24	浜名の橋	
25	猪の鼻	
26	高師の浜	
27	八橋	

②8	二村の山	三河
②9	宮路の山	三河
③0	しかすがの渡り	三河
③1	鳴海の浦	尾張
32	墨俣といふ渡り	尾張
33	野上	尾張
③4	不破の関	美濃
35	あつみの山	美濃
36	みつかさの山	美濃
③7	犬上	美濃
38	神崎	美濃
39	野州	近江
40	栗太	近江
41	なで島	近江
④2	竹生島	近江
④3	瀬田の橋	近江
④4	粟津	近江
④5	関(逢坂)	京
46	京	京

※実線で囲んだところが地理的誤りを有する個所。

※番号を○で囲んだ地名は歌枕と認められるもの。ただし歌枕

に關しては、工藤進思郎氏『更級日記』に關する一考察――

上洛の記に見える地名とその記事をめぐって」に詳細に検討

されており、それに従った。

一見してこれら地理的な誤りとみなされる個所は、主に国境いの記述の個所に生じていることに気づく。この上洛紀行は

「下総の国と武蔵との境にてある太井川」

「武蔵と相模との中にゐて、あすだ川」

「からうじて越え出でて、関山にとどまりぬ。これよりは駿河なり。」

「ぬまじりといふ所もすがと過ぎて、……遠江にかかる。」

「猪の鼻といふ坂の、えも言はずわびしきをのぼりぬれば三河国……」

……

「三河と尾張となるしかすがの渡り」

「美濃の国になる境に、墨俣といふ渡り」

「不破の関、あつみの山など越えて近江国……」

というように国境いを越え新たな国に入るといふ記述が几帳面なほどに記される。上総から京への旅が結局は「ここの国々を過ぎぬるに」と総じて言われるように、一連らなりの京への道程としてではなく、多くの国々を一つ一つ通過して来たのだという意識が強いのである。これはことさら作者に特有の意識とはいえないかもしれない。旅するものに通有の意識であるかもしれない。一つの国を越え一つの国に入ることが旅程のはかどりであり、目的地に一步一步近づくと実感である。国境を通過することが苦しい旅の終りに近づく目途であったはずである。しかし、この上洛紀行では国境いを越える几帳面なまでの記述に、目的地である憧れの京に一足一足近づくのだからという期待や喜びは見られない。むしろ「ここを立ちなむこともあはれに悲しきに」「のぼるは止まりなどして行き別るるほど、ゆくもとまるもみな泣きなどす。」「今は(早くも)武蔵の国になりぬ。」「ましてこのやどりを立たむことさへあかずおぼゆ。」「ぬまじりといふ所もすがと過ぎて」という表現に見られるように、離別の哀愁や旅程の進行に対する空しさのごとき口吻がのぞくのである。

上洛の旅の記に、京に着いて後に味わったはずの幻滅や失意がすでに影を落としているかと思われる書き方である。日記執筆時の晩年の

回想の視点が上洛紀行にも強く入りこんでいることを想定させる。そして、一つの国を越え、一つの国に入ったとする国境通過の意識へのこだわりに地理的記述の誤りが大きくかかわっているのではないかと考えられる。

国境いについての几帳面なまでの記述は、旅程の回想を国毎にまとまりをつけ、地理的矛盾を避ける構成意識を示すものである。また「この頃の国々を過ぎ」てようやくにして京に至る遙かな旅路の彼方に隔てられた上総への思いをも担っているものである。

(一)を除いて(二)は下総の国と武蔵との国境いでの乳母との別離が描かれ、(三)は竹芝伝説を描いた後に隅田川を武蔵と相模との国境いとし、(四)は富士川伝説を記し地理的に駿河から遠江への境であるかのように配し、(五)はしかすがの渡りを三河と尾張の国境いとしているものである。

ところでこの上洛紀行には三首の和歌が含まれている。

- 1 朽ちもせぬこの川柱残らずは
昔の跡をいかで知らまし
- 2 まどろまじ今宵ならではいつか見む
くろとの浜の秋の夜の月
- 3 嵐こそ吹き来ざりけれ宮路山
まだもみぢ葉の散らで残れる

この三首の和歌に目を転じ、その配置について見ると、これらの和歌はいずれも地理的誤り或いは不審とされる個所に含まれている。つまり1・2の歌は地理的に不審な(一)とした黒戸の浜の記述の前後、3の歌は地理的順序が乱れている(四)宮路山の歌である。

こうしてみると地理上の誤りといわれるものは、それが作者の記憶違いにもとづく偶然であるにしても、歌と伝説の配置と国境いに対する特別な意識にもとづいた構成意識と何らかのかかわりがあるのでは

ないかと推測されるのである。さらに臆測をたくましくすれば、地理上の誤りと見做されるものは、歌と伝説を採録布置する上での紀行文構成上の何らかの意図に発するものではなかったか、或いは日記執筆時の晩年の心情からする何らかの必然だったのではないかと、単純な記憶違いとはいえない切れないものを感じるのである。その点を具体的にいえば次のようになる。

四

1・2の歌は、日記本文では次のように記される。

十七日のつとめて立つ。昔、下総の国に、まののてうといふ人住みけり。疋布を千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱残らずは

昔の跡をいかで知らまし

その夜は、くろとの浜といふ所にとまる。片つ方はひろ山なる所の砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじう明かきに、風の音もいみじう心ぼそし。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見む

くろとの浜の秋の夜の月

草深い上総で孝標女に物語への目をひらいたのが姉や継母であったように、作歌の手ほどきもこの地で姉や継母に負うところが大きかったであろう。特に継母高階成行女は、上総大輔と称した女流であり後拾遺作者である。その影響は大であったろう。この九十日の旅の期間「人々をかしがりて歌よみなどする」機会も多かったろうし、孝標女にとっても習作をものする格好の機会でもあったろう。この上洛紀行に三首の詠しかとどめないことも、習作期の詠草の少なさを当然と感

じるよりは、歌稿等からの厳選を感じさせる。

その意味では「朽ちもせぬ」の歌が紀行中の最初の詠草であるだけでなく、日記冒頭部に配された第一首であることは注意されてよいであろう。三角洋一氏がこの歌に関して、

「いま日記の執筆にとりかかったばかりの孝標女は、「まののてう」の長者伝説とその遺跡にふれての感慨を詠んだ歌に、さらなる新たな思いとして、この日記が後の世の読者が彼女をしのぶよすがとなってくればよいという祈りを籠めたと見たいのである。もし彼女にこのような思い入れがあったと認めてよいのなら、そこからはすでに歌人としてか、物語作者としてか、ともかく文学にたずさわってきた経歴をもち、いまあらためて自伝を綴ろうとしているその横顔が浮かんでくるような気がするが、いかがであろうか。」⁽⁸⁾

もちろん「朽ちもせぬ」の歌は下総の国まのの長者伝説を耳にし、その跡を突見した感銘を素直に歌に託したものである。朽ち残る川柱に昔をしのぶのは、葦間より見ゆる長柄の橋柱むかしの跡のしるべなりけり（藤原清正 拾遺集雑上）や、朽ちもせぬ長柄の橋の橋柱ひさしきことの見えもするかな（平兼盛 後拾遺集賀）等と同様の歌であり、類型的な歌である。しかし、類型的発想に参画し得ていることが「昔の跡」をしのぶ素直な心情の再現を託すものとして採録されたものであろう。それと同時に「昔の跡」をしのぶ晩年の心情を込めて第一首に据えることは十分に考えられよう。

「黒戸の浜」が地理的順序からすれば「いかだ」「まののてう」に先行する可能性があることは先述の通りであるが、第二首目「黒戸の浜」の歌が、「朽ちもせぬ」の歌に先行して詠まれていたと見たほうが自然である。「人々をかしがりて歌よみなどするに」幼い自分も興を催して唱和したように書かれているが、これは日記執筆時の作為で

あろう。月明に映える黒戸の浜の風光に興をもよおした詠歌として見た場合、地名の黒に対して、砂子の白、松原の青、月明の明か（赤）等の色彩の対照をねらった技巧に、風光の美に触発された感興を受けとめることができる。「まどろまじ」という強い初句は、美しい黒戸の浜の風光に対する賛嘆に発すると見ることに不自然はない。

しかし、作者も「くろとの浜といふ所」と紹介するように黒戸の浜は歌枕でもなく、歌語としては未知の地である。「砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじう明かきに」と地の文の説明があつてはじめて風光の美が感知され地名の黒と砂子の白の対比的効果も地の文の存在をまっけてはじめて生かされるのであつて、歌そのものは、黒戸の浜の風光美を伝えるものではない。自立する歌として、地の文を離れてこの歌を見ると、「まどろまじ」という強い詠嘆的な意志を触発するものは「今宵ならではいつか見む」という二度と見るのかなわぬ東国の地黒戸の浜に対する惜別の心情である。「くろとの浜の秋の夜の月」は、地名と月明に輝く砂子の対比的効果に依拠しながら卓抜な風光の美を詠じたものには違いないが、再びこの地の月を眺めることはないのだという感傷に染められた惜別の情の故に印象を一層鮮明にしたものである。「こよひならではいつか見む」の感傷がこの歌の主題である。「風の音いみじう心ほそし」というのが、この歌を詠じた黒戸の浜での本来の心情をのぞかせているのではなからうか。

紀行文の中では黒戸の浜の風光に興を催した人々に唱和したものとして位置づけられているが、歌を紀行文から切り離して見れば、住みなれた上総の地に対する惜別の情を詠じたものと見るのが自然である。「ここを立ちなむこともあはれに悲しきに」という、国府を発ち、「いまたち」を離れる折りの心情と重なり合うものである。

地理的順序に対する第一の不審は「黒戸の浜」が上総の地名である

可能性が強いのに、「いかだ」「まののてう」という下総の地より後になつてゐる点であつた。作者に記憶の誤りがあつたとすれば、「朽ちもせぬ」の歌と「黒戸の浜」の歌の配列意図がその記憶の誤りに関連してゐると考えられる。構成意図が先行して地理的順序を無視したという作為とまではいい切れないが、文脈の中で新たな意味を担い得る歌が記憶の誤りを誘引したのかもしれない。結果的には歌の配置が地理的現実の優先するものとなつてゐる。

(五)に含まれるもう一首、3の歌は日記本文では次のように配置されている。

八橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見どころもなし。
二村の山の中にとまりたる夜、大きな柿の木の下に庵を造りたれば、夜ひとよ、庵の上に柿の落ちかかりたるを、人々ひろひなです。

宮路の山といふ所越ゆるほど、十月つごもりなるに、紅葉散らで盛りなり。

嵐こそ吹き来ざりけれ宮路山

まだもみぢ葉の散らで残れる

三河と尾張となるしかすがの渡り、げに思ひわづらひぬべくをかし。

地理的順序が乱れてゐる八橋―二村山―宮路山―しかすがの渡りは全て三河国内の歌枕である。歌枕意識の特に顕著な部分であるといつてよい。

宝飯郡豊川河口の「しかすがの渡り」を「三河と尾張となる」国境の地点と解しているのは明らかな誤りであるから、八橋以下の地理的乱れも記憶違いと考えざるを得ないのである。しかし、八橋のごとき特に高名な歌枕を含むこれらの地名が不用意な記憶違いとも考えにくい。記憶違いであるにしてもその記憶を妥当とする紀行文構成上の

意図が存在するように思うのである。「しかすがの渡り」を国境いとするのは、歌の配置にかかわる文飾意識と国境いを几帳面に記す構成意識とにかかわりがあるように思われる。

「宮路山」は、持統天皇の三河行幸の折、行在所が置かれたのでその名がつけられたという伝承を持つ。また「君があたり雲居に見つつ宮路山打ち越えゆかん道もしらなく」(後撰集 卷十三恋五 よみ人しらず)などの歌でしられる歌枕である。「宮」という名を持つ故に都人にとっては特に旅情をそそり、感興をおぼえる対象だったのであろう。作者の歌も「治天の君の居られる『宮』をその名に負う宮路の山ゆえ、凋落の影もありえぬ、という感嘆を詠んだ」と見る新潮日本古典集成の注解に従うべきであらう。

そう見れば紀行の中では「十月のつごもり」冬のさなかだというのに紅葉の盛りを目にした素朴な感嘆を詠んで、峠越えの祝意を表わした道中儀札歌であるかのような趣きをもつことになる。しかし、「嵐こそ吹きこざりけれ」という素朴に過ぎる感動を詠作時までさかのぼって考えて見ると、そこには遠江から引き続いた苦しい旅からの蘇生の思いがあつたのではないか。作者は小夜の中山越えのあたりから病いを発し、天龍川の飯屋に滞在して病いを養つたと記す。「冬深くなりたれば、川風けはしく吹き上げつつ堪へがたくおぼえけり」という遠江からの旅の苦痛が、宮路山の紅葉を目に映して別世界のごとき感動を覚えたであろうことは想像に難くない。しかもその地が宮路という神域に通じる名をもつことに神の加護のもとに健康を恢復し無事旅を続ける蘇生の思いが籠められたものであらう。晩年からは特に感概を催す歌であるがために捨てられなかつたものであらう。

しかし、紀行では特にそうした感概が表に立てられているわけではない。歌枕に依つて旅の感興の一駒として綴られてゐるに過ぎない。それは「しかすがの渡り」を国境いと、その直前にこの和歌を置く

構成意図が先行したためである。「しかすがの渡りげに思ひわずらひぬべくをかし」というのは「行けばあり行かねば苦ししかすがの渡りに来てぞ思ひわづらふ」という中務の歌を想起し、「げに」と頷くという文飾である。宮路の山の歌が直前に配されることによって、嵐に吹き乱されぬ紅葉に輝く聖地を離れ行く惜別の念と、都に近づく喜びという対立感の中で「げに思ひわづらひぬべく」という文飾は一層生きてくるわけである。また「行けばあり行かねば苦し」という迷いの発するところとして「しかすがの渡り」は国境いであることがいっそう「をかし」と興ずることができる。それは記憶違いにはちがいないのだが、文飾意識が記憶違いを気づかせないほど先行しているのだと見られよう。

地理的順序の誤りが、歌を配置する上での作為とまではいえませんが、歌の効果的な配置と文飾意識によって記憶の誤りが誘引されているのだということはできよう。三河の国の高名な歌枕八橋に対する失望が、宮路山、しかすがの渡りを強く際立たせる意識を誘い、必要以上に関興を抱いたと記させたかも知れない。しかし、「しかすがの渡り」に特に感興を抱き、これを国境いとする意識は和歌の配置意図だけでは割り切れないものがある。そこには晩年の回想の中の東国に對する特別な意識が影を落としているのではないかと思われる。その点をより強く感じさせるのは(二)の地理的問題である。

五

(一)の地理的問題点である「太井川」を下総の国と武蔵の国境いであるとした点を考えてみたい。この一段は紀行中でも特に印象的な一段である。

そのつとめて、そこを立ちて、下総の国と武蔵との境にてある太井川といふが上の瀬、まつさとの渡りの津にとまりて、夜ひとよ、

舟にてかつがつ物など渡す。乳母なる人は、をとこなども亡くなして、境にて子うみたりしかば、はなれて別にのぼる。

という説明的記述の後に乳母との別離の場面の描写がある。上総の国へは作者の実母は同行せず継母上総大輔がついていた。作者はこの継母を慕う気持も強かったが、実母が居ない上総での生活の中で乳母を頼る気持はまた特別なものがあつたであろう。乳母は異郷で夫に死別、今上京の旅に出るから出産したというのである。出産の穢れと産褥のために一行と別れて行く。別れの場面を作者は

月残りなくさし入りたるに、紅の衣上に着て、うちなやみて臥したる月かげ、さやうの人にはこよなくすぎて、いと白く清げにて、めづらしと思ひてかきなでつつうち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど、いそぎ率て行かるこち、いとあかずわりなし。おもかげにおぼえて悲しければ、月の興もおぼえず、くんじ臥しぬ。

と描く。この乳母は京へ着いて後治安元年三月一日に死去している。その折、「まつさとの渡りの月かげあはれに見し乳母も三月つひたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに」と、産後のやつれた姿を月光にまとわれて「紅」と「白」の対比も鮮やかに美化されて描かれた別離の場面が想起されている。

乳母を月光にまとわれた「月かげ」の人とする描写は、伊藤博氏が指摘されたように、源氏物語橋姫の巻、

ほのかなりし月影の見劣りせずは、まほならんやは。けはひありさま、はた、さばかりならむをぞ、あらまほしきほどとおぼえはべるべき。

という描写とのかかわりが想定され、別離の悲しみが自から繊細な描写を可能にしたと見るよりは意識的な手法であるといつてよい。まつさとの渡りの津での別離が死別となった哀惜の念が鎮魂の思いに駆り立てているのであろう。

乳母との離別の重さを月光の下に収斂する描写を意識的手法と見るものに、小谷野純一氏の論がある。⁽⁹⁾氏はこの一段が、「乳母との別れ、及び、翌朝の上総の国人との別れ」を「叙述の眼目としている」ものであり、「ここに月の光を媒介としているのは、手法に相違なく、明白に前段（黒戸の浜の段。筆者注）を意識したものであった。」とされ、黒戸の浜の情景描写は

「地名の黒に発する色彩対照による極めて手法的な記述であるが、それは皎々たる月の光に向けられた作者の眼を根基としているのであり、究極的には歌に示される如く、その掬い上げた月下の光景に自ら積極的に身を没するものである。結局、作者はこのような前段のありようを念頭におきつつ対蹠的に月の光を介在せしめているのだといえる。この場合、かりに『くろとの浜』が上総の地であったとすれば、かかる技巧は一層明瞭となり、むしろ鮮明化のために敢えて前段に配したということにさえなるわけだが、何れにせよ、当所の作者は、月下の乳母の姿に悲哀の色を見出し、自れの内部に充滿し続けるのであって、この時、月は最早忌避されるものとしてのみ処されなくてはならない。」

「ともあれこうして一段の焦点を離別に絞る作者なのであった。明言すれば、この所為において作者はこれまでの叙述の区切りとする。であるからこそ、「ふとるがは」は、国境、つまり下総と武蔵との境でなければならなかったのである。」

このように、黒戸の浜、まつさとの渡りの津の段における意図的手法を重視され、太井川を下総と武蔵との国境とすることは「意識的な処置、仮構であって、是が非でも当所を国境の地点とせねばならなかったのではないか」とされた。

小谷野氏のこの見解は極めて妥当なものであり異をさしはさむ余地はないのであるが、意図的な処置によって国境いを比定したとするこ

とにいささか疑問を抱くのである。それは(三)の誤りもまた(二)に関連する国境いに関する誤りだからである。太井川を下総と武蔵との国境いとしてしまったからこそ、隅田川を武蔵と相模との境とせざるを得なくなるわけであるが、地理的変改を加えてまで意図的、仮構的に処理したとは考えられない。前記五つの誤りには数えなかったが、尾張から美濃にかかる地点で「美濃の国になる境に、墨俣といふ渡りして」とあるのも厳密に言えば誤りである。墨俣の渡りが国境いではない。ただここは漠然と国境いの近くと誤っているものと考えられるので誤りとするには当たらないであろう。しかし、ここでも「美濃の国なる境に」とことさらにいう態度は注目されねばならないであろう。

京までの道中無数の川を渡らねばならない旅である。川を渡ることには此岸に別れを告げ彼岸に歩み入る点で、特に離別の思いをかき立てずにはおかない。橋もないいくつもの渡河に作者は離別の思いを強くしたであろう。松さとの渡りの乳母との離別がその思いをいっそうかき立てるのであったかもしれない。国境いに横たわる川であればいっそうその感は深い。作者が通過した国々を一つも余さず言及し、国境を強調するのは離別の重みを国境を通過する毎に味わった実感のなせるわざに違いない。作者にとつて国境いは離別の意識と切り離せないものであったに違いない。

野山蘆荻の中を分くるよりほかのことなくて、武蔵と相模との中
にゐて、あすだ川といふ、在五中将の「いざ言問はむ」と詠みける
渡りなり、中将の集には隅田川とあり、舟にて渡りぬれば、相模の
国になりぬ。

とことさらに伊勢物語に言及するのは、国境いにたどりついて「限りなく遠くも来にけるかな」という詠嘆の切実さと、さらに此岸を捨てて知らぬ異郷に歩み入る離別の情に共感するからに他ならない。太井川を下総の国と武蔵との国境いに存ずるとしてしまったことによる誤

りとして一連りの地理上の誤りであるが、地理的認識の不確かさに、国境いに対して抱く作者の特別な離別意識が作用してかかる誤りを導いたものと考えられるのである。

工藤進思郎氏はこの(二)の誤りが単純な記憶違いによるものではなく竹芝伝説と深くかかわるものとして考えておられる⁽¹¹⁾。

「ここに業平を持ち出して来たのは(略)、東国に安住の地を求めて都を脱出したのが、決して竹芝伝説の姫宮だけではなかったのだということを強調したからだと思われる。つまり人口に膾炙した業平の東下りについて触れることによって、武蔵の国の一伝説に強い共感を寄せるわが心の真実を読者に訴えようとする、この作者の積極的な姿勢をここに読みとることができであろう。『すみだ河』の位置が事実と大きく食い違っているのも、竹芝伝説のいわばだめ押しとして、業平東下りの話が持ち出されたことと、決して無縁ではあるまい。」

と、この地理的誤りも作者の構成意識とかかわるものと考えておられる。

竹芝伝説が作者の東国に対する特別な意識、いわば東国故郷意識と深くかかわるものであることはしばしば論ぜられて来たところである。業平への共感が作者の竹芝伝説に寄せる共感と同種のものであり、作者の「心の真実」を内包するものであることは同感である。しかし、すみだ川の地理的誤りは、乳母との離別の地を下総と武蔵との境とした誤りと一連のものである。「業平東下りの話が持ち出されたことと、決して無縁では」ないが、国境いをことさら意識する離別の感情が作用した誤りである。

(四)の富士川の記述順に対する処置は、(一)、(三)の国境における誤りとは多少異質なものと考えられる。富士川の記述が大井川の後に記されることに不審があり、地理上の誤りがあると考えられるものである

が、富士川を駿河の国と遠江との国境と明記しているわけではない。この一段は富士川伝説を記すことに主眼がある。伝説そのものはある人の実際の経験談として書かれているものであり、国司任命が富士山頂に集う神々の託宣であるという、作者にとって強い関心を寄せざるを得ないものであった。その意味では関心の方向こそ違え、竹芝寺伝説に対すると同じ採録の態度であり、作者の感想を混じえず、ありのままの聞き書きとして記す態度も共通のものである。

足柄山中の暗く恐ろしげる世界での遊女との印象的な出会いと離別を描いた後、澄明な駿河の風光を、富士の山、清見が関、田子の浦、大井川、つまり、山、関、浦、川と変化をつけて描き出すのは明らかに手法上の工夫である。伝説の採録は駿河国内の歌枕とその風光に対する感興を記すこととは異質なものである。そのため富士川伝説が駿河の記述の最後尾に配され、駿河の記事をしめくくるものとして置かれたものと見るのが自然であるように思われる。その意味で(四)を記述の誤りとすることはできないのではないかと考える。この段の地理上の問題は作者の意図的な構成意識によるものと考えるのである。

六

上洛の旅の記に見られる五つの地理上の問題点を検討して来たが、一般に地理的誤り、記憶違いと見做されるものの内容は様ではない。和歌を配置する上での文飾意識や構成意図や伝説を記載する上での配置意識といった紀行文の構成意識にかかわるものに、国境に対して抱く特別な離別の感情がないまぜになつてこれらの地理上の問題点が存在することが確かめられたと思う。

上洛の旅の記における三首の和歌を検討することが当初の目的であったが、地理的問題にかかわらず過ぎた感がある。紀行中の三首の歌の配置がのぞかせる作者の心情や、歌枕に寄せる作者の関心を通して

も、後年「物語歌のことをのみ心に占めで」と悔恨の言辞を洩らさねばならなかった歌に対する意識の一端を見ることができた。しかし、それ以上に十三歳の体験である東国からの旅が、離別の重みを反芻する晩年の作者の特別な感慨にいろどられていることに気づくのである。上洛の旅の記も、人生を離別の相において見る作者晩年の心情に色濃く染められているといわねばならない。

注(1) 杉谷寿郎氏「更級日記の構造」『語文』・昭47・3。

(2) 近藤一一氏「更級日記構想論」『国語と国文学』・昭26・5。

(3) 渋谷孝氏「更級日記における〈東海道上洛の記〉の一考察——作品の文芸的世界における意味」『平安文学研究』・昭43・12。菊田茂男氏「更級日記——主題の把握」『国文学』・昭45・7。工藤進思郎氏「更級日記」に関する一考察——上洛の記に見える地名とその記事をめぐる」『金城学院大学論集』・昭47・12。「更級日記」の竹芝伝説をめぐる——作者の東国故郷意識との関連を中心に」『岡山大学国文論稿』・昭48・3。小谷野純一氏「更級日記」上洛の旅の記についての一視点」『日本文学研究』・昭52・1。「更級日記」上洛の旅の叙述をめぐる」『平安文学研究』・昭52・6。伊藤博氏「更級日記上洛の記試論」『日記文学——作品論の試み』論集中古文学3・昭54・10。等数多く発表されている。ただし小谷野純一氏は「東国故郷意識」を認めることには否定的である。

(4) 「札幌大学教養部・女子短期大学部紀要」第一八号B・昭56・3。

(5) 本文引用は秋山虔氏校注『更級日記』新潮日本古典集成による。以下同。

(6) 阿部秋生氏『評釈更級日記』明治書院刊・昭42・6。

(7) 秋山虔氏、前掲新潮日本古典集成『更級日記』解説。

(8) 三角洋一氏「更級日記 歌ことば」『国文学』昭56・1。

(9) 伊藤博氏、前掲(3)「更級日記上洛の記試論」

(10) 小谷野純一氏、前掲(3)『更級日記』上洛の旅の記の叙述をめぐる

(11) 工藤進思郎氏、前掲(3)「更級日記」に関する一考察」

この稿執筆中、五十嵐三郎先生の計に接した。哀悼の念に堪えない。拙稿を謹んで先生の御霊に捧げ以て安らかならんことを祈る。